07

「なぁ、アンタ。さっきの言葉に嘘はねぇんだな？」
『無論だよ』
何故だかは解らないが、夕星（ゆうせい）にはヘッドセットを介して〈エクステンド〉の操縦法が頭に流れ込んできた。
そんな自分でさえ、知り得ない機能がこの〈エクステンド〉にはあるというのか？
『まず前提として。〈エクステンド〉に備えられた二丁の突撃機銃は、我々ＡＲＡＭＳ（アームズ）が強奪し、無理やり増設しただけの予備兵装に過ぎない。だから、その銃じゃ牽制こそ出来ても、君と同じエゴシエーターによって生み出された怪獣には通用しないんだ』
「待て待て、難しい専門用語ばっか使いやがって！　もっと俺みたいなバカでも分かるように説明しやがれ！」
『失敬。君にも分かりやすく説明するのなら、そうだな。――――いまの〈エクステンド〉には、奴を倒せる武器が搭載されていないんだ。ただの一つもな』
夕星は今日まで〈エクステンド〉が怪獣に勝利する瞬間を幾度となく見てきた。けれど、その決着の全てが近接攻撃によって付いていたことに、今更ながら気付かされる。
確かにこれまでも〈エクステンド〉は、突撃機銃を用いたこともあったが、ノイズまみれの声が言うように、使われた用途は牽制程度。それが決定打となったことなど、ただの一度もなかったのだ。
では、あの怪獣を倒すには、近接に持ち込み、殴り倒すしかないというのか？
〈エクステンド〉の右腕は完全に壊れてしまっている。そんな状態で敵に素手の殴り合いを挑もうなど、無謀としか言いようがない
「理不尽もいいところだろ……」
落胆にくれようと、そんな事情を怪獣は知り得なかった。
伸ばされる両腕は胸部の装甲を……いや、恐らくは襟首を狙っている！
『おや、今度は柔道みたいだ』
〈エクステンド〉が、組んで、投げられでもすれば、操縦席を備えた頭部も確実に地面へと衝突する。そうなれば中の夕星も、鉄と鉄の板挟みだ。
「このッ……サンドイッチになってたまるかよ！」
夕星は咄嗟に踏板（キックペダル）を蹴って、バックステップ。怪獣の爪は装甲をガリガリと削りながらも、〈エクステンド〉を捉えるには至らなかった。
だが、今のような回避を次もできるとは限らない。

それどころか夕星の三管器官は、機体の急性動によってよって激しい負担を掛けられていた。車酔いならぬ、〈エクステンド〉酔いだ。

何故ロボットもののアニメや漫画で、パイロットたちが揃いも揃ってスウェットのような専用のスーツを着込んでいるか、わかった気がする。あれは操縦者の貧弱な肉体を庇護するためにこそあるのだ。

「決めたぞ……この野郎を倒したら、絶対パイロットスーツを作るんだ。デザインもカッコよくて、機能性の高いヤツ！」

なんて自分を鼓舞してみたが、

それは強がりにしかならない。〈エクステンド〉には、あの怪獣に通じる武器がないのだから。

「……いっそ差し違える覚悟で突っ込んでみるか。相応の質量がブチ当たれば、野郎もタダじゃ済まないはずだろうし、」

震える指先で操縦者を握りしめる。玉砕覚悟でそれを押し倒そうとして、

『自暴自棄になるには少し早すぎるぞ。我々ＡＲＡＭＳ（アームズ）が願いをかなえるためには、まだ〈エクステンド〉を失うわけにはいかないんだ』

ノイズまみれの声が通信機越しに囁く。

『もちろん、乗り手である君もな。――――それに言ったろう？　私が〈エクステンド〉の真の力を教えてやるって』

「だったら、勿体ぶってないで、それを早く教えやがれ！」

こっちにはもう後がないのだ。顔もわからぬ相手に言葉を選んでいる余裕もない。

「まぁ、まぁ、そう急かすなよ。〈エクステンド〉が秘める力はにわかに信じ難いものだからな。どう伝えていいか、私も迷っているだ」

「この際だッ！　どんなミラクルでも信じてやるッ！」

向こうから聞こえる「ジジ……ジジ……」というノイズ。またも彼女は笑いを押し殺しているのだろう。

『なら教えるよ、〈エクステンド〉の備える真の力。それは「現実改変能力」だ』

「現実……改変だと？」

『現実固定定数（メルマー）に干渉し、君たちの日常を歪曲させうる力だ。もちろん、制約もあるし、なんでも好き勝手に現実へ干渉できるわけじゃないよ。ただ、そうだな』

効果の有効範囲は〈エクステンド〉を中心に半径一〇メートル程度。

範囲内に存在する物質を一度砂塵に変換することによって、それらを材料に様々な武器を創り出すことができるらしい。

『目には目を。歯に歯を。エゴシエーターにはエゴシエーターを。そうやって創られたエゴシエーター製の武器であれば、あの怪獣にも有効なはずさ♪』

正直、彼女の説明はほとんど理解できなかったし、容易に受け入れられるものではなかった。
それに〈エクステンド〉にそんなチートじみた力が備わっていると仮定して。その力を解放するにはどうすればいいのか？
夕星はコックピット中を見渡したが、それらしいスイッチを見つけることは叶わなかった。
「じゃあ、その現実改変能力を使うにはどうすれば良いんだよ！」
『簡単さ。君はただ目を閉じて、願うだけでいい。それだけで簡単に願いは叶うんだ』
「そんな、都合いいわけ」
『そんな、都合いいわけあるだろ？　君は既に「願い」の力で砂になった〈エクステンド〉を作り直してみせたんだから』
しばしの沈黙の後に、夕星は深呼吸をすることにした。
一度力を抜いて、解れ掛けていた集中の糸を紡ぎ直す。
「……」
何が、願いは簡単に叶うだ？　そうであれば、誰も苦労はしないのだ。
だが、夕星はその可能性に縋らなければならない。あの怪獣を倒し、陽真里を守る為に――

――

「わかった。やってやるよ」
瞳を閉ざし、願いを明瞭にイメージする。
それに応えるように、辺りの建造物が砂塵と化して〈エクステンド〉の元へ集約された。そうやって形作られるのは紛れもない、一本の刀剣である。
『日本刀を模した実体剣か。ロボットものにおいてはビームサーベルに次いで、ベタな武器を選んだようだね』
「うるせぇな、なんだっていいだろ」
〈エクステンド〉は刃を手に取って、それを担ぐようにして構えた。翡翠色をした双眸のカメラアイは輝きを増し、目の前の敵を睨みつける。
対峙する怪獣が取ったのは、前腕で上半身をガードするコンパクトな構えだ。
ここにきて始まりのボクシングに戻してきたか。恐らくは刃による初撃を躱し、以前のようにカウンターを狙う魂胆であろう。
「ここまで来て原点回帰か……けど、安心したぜ、武道家気取り」
『ほう、それはどうしてかな？』
「だってそうだろ？　あの怪獣は他の怪獣と何もかもが違う。だから突然何をして来ても不思議じゃねぇんだ。それこそ、いきなりビームとか撃って来てもな」
けれど、怪獣はそうしない。あくまでも武道や格闘技術での決着を望んでいるように見えるのだ。
勘になってしまうが、野郎に隠された奥の手はない。あの四肢から繰り出される変幻自在の技の数々こそが野郎の切り札なのだから。
「行くぞ、クソ怪獣ッッ！」

勝負は一瞬だ。創造した刃の間合いに怪獣が飛び込んでくる。その一瞬で、
「解除ッ！」
〈エクステンド〉は刀を宙に放った。掌から離れたそれは、また一瞬で砂塵へと崩れ去る。
きっと、怪獣は自分のことを存分に警戒してくれたのだろう。「わざわざ、武器を捨てるなんて、何かある」と。
一丁前にデカい図体をしている癖に、そんな小狡いことを考えてしまったのだから、怪獣は足を止めてしまったのだ。
「もう一回言ってやろうか？　フェイントだって」
夕星は一瞬のチャンスを絶対に逃さない。
〈エクステンド〉は頭上に垂れた蜘蛛の糸を掴むように、舞い散る砂塵へと手を伸ばした。
そして、再び願う。
「なぁ、クソ怪獣。さんざん追い詰めてくれたお礼に、一つ良いことを事教えてやるよ。殴らせずに勝つのが武道や格闘技だって言うのなら、殴り殴られるのが勝負って言うんだ。んでもってな」
砂塵はグローブの形を成してエクステンドの左拳を覆った。さらに壊れた右腕を補強するように砂塵を集約、無理やりにでも動かしてみせる。
「勝負はビビった方の負けなんだよッ！」
〈エクステンド〉の両拳が連続で入った。
『ＣＯＮＧＲＡＴＵＬＡＴＩＯＮ（最高だ）――――さぁ、トドメを刺せ、エゴシエーター！』
最後に夕星は、機体の右脚を振り上げる。
鉄脚一閃。舞い散る砂塵で脛部に新たなブレードを創造し、回し蹴りを放った。